

Title	伝統芸能の継承：京都上七軒を中心に
Sub Title	
Author	中原, 逸郎(Nakahara, Itsuro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2011
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.72 (2011. ) ,p.152- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成22年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0152">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000072-0152</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 伝統芸能の継承

——京都上七軒を中心に——

中 原 逸 郎

### 1. はじめに

都市民俗学の視点から、近代の都市における民俗の一つとして、京都の花街の芸を対象として調査研究を行っている。対象地は北野上七軒（上京区）という京都最古と言われる花街である。花街中で、聞き取りによって歴史、習俗、心情などを記録し、それを通じて日本の近代化と都市化のプロセスの一端を社会学的に探ろうとしている。

日本には花街と呼ばれる繁華街がある。花街という用語は、①地元で使用される民俗語彙、②外部から創られたイメージによる観念的な概念、③行政上の風俗の統制に関わる行政用語の三つからなると考える。調査対象とする上七軒ではカガイと音読みにこだわることに特徴があり、独自の地域性を構築する伝統を維持してきた。

### 2. 主な先行研究

都市民俗学は、伝承母体の崩壊、柳田国男の個性に依存した学問の性格、曖昧な概念の使用と方法論の脆弱さなどにより、民俗学に退潮の兆しがある中で、その再構築をめざす中で生まれた。民俗学は郷愁に満ちた「伝統」を重ね合わせ、古風、固有、基層、不変、善などの価値を与え続けた。鈴木は、伝統の本質には変わりにくい側面と作り変えられる側面があり、作り変えられる側面は民俗学では意識されることの少ない部分であったとしている。（鈴木：1998）

中野は、九州の小倉祇園太鼓の主人公である「無法松」に関する研究で、祭礼における「わざ」としての太鼓の打法に注目し、「無法松」と自己を同一視しながら生きる語り手に焦点を絞り、一つの芸の継承と社会の変化の関係の変化、社会への受容の変化を見ている。（中野：2004）

田口は、勤め帰りの男女の憩いの場所としての盛り場に、明治、大正、第二次大戦後まで生き抜いた花街の影響を見ることは不可能であるとしつつも、伝統的な花街が生んだマチ柄が盛り場の基盤となっていると考えた。そしてマチ柄を作っている人々の意識が民俗学の対象足りうと見え、信州上田（長野県）の花街を研究した。その聞き取りにおいて、遊郭とは違う、花街に生きる芸妓のプライドを垣間見たとし、様々な角度から花街で生きた人々の意識を聞き取ることの重要性を述べている。（田口：1981）

本研究は、この田口の研究を基盤として、「個」にこだわりながら上七軒の芸の変遷や社会構造について、聞き取りを進めている。

### 3. 調査の目標

先行研究を踏まえ、本稿では花街に生きる人々の心情、言説または語りとそれを規定する時代背景、社会的変化を把握することを目標とした。

#### 4. 調査経過

北野上七軒を調査対象としたのは、平成21年からである。まず平成21年9月21日から10月31日に上七軒の芸舞妓にちなんだ写真展を行った。これによって元芸妓や元西陣の職人、個展開催を許可してくれた元お茶屋経営者などの話を聞いた。

平成21年度は、上七軒の芸舞妓の人数を把握するため、名簿作りを開始した。しかし、昭和27年から平成21年までは期間も長く、資料に限られているため、完成したのは平成22年9月となった。

平成22年度も引き続き、上七軒での聞き取りに力を入れ、半構造的インタビューを行った。昨年に続き地元で行われた、「上七軒盆をどり」にちなんで、7月19日から31日、上七軒内で写真の個展を行った。また、10月28日には昭和30年代から40年代にかけて上七軒の北野をどりの演出家として活躍し、上七軒のお茶屋の主人をしていた石田民三を語る会を実施した。これらにより、昭和30年代から40年代を知る地元住民から聞き取りを行った。その他、4月の北野をどり、7月の上七軒盆をどり、10月の寿会芸妓のお披露目、1月の始業式（過年度の成績発表会）2月の梅花祭などの年中行事に参加し説明用画像の収録に努めた。ビデオ撮影の講習会に参加し、撮影技術の向上にも努めた。

学会ではカルチュラルスタディ、生活学会、現在風俗研究会、民俗芸能学会、文化経済学会、JOHAの大会に参加した。特にJOHAは連続してワークショップに参加し、聞き取りに関するスキルを高めることに努めた。

#### 5. 成果

以上により、次のような成果を得た。

- (ア) 昭和27年以降のお茶屋数、北野をどりの参加芸舞妓数、総出演者数
- (イ) 昭和30年代のお茶屋と関係者の地理的關係
- (ウ) 大正以前の上七軒関係の古文書の存在確認
  - ① 法規『上七軒貸座敷業組規約』など個人所蔵資料
  - ② 大正時代から昭和初めの西陣と上七軒の關係を表すような個人所蔵の写真集3点
  - ③ 大正時代のお茶屋内部の分かる個人所蔵の絵葉書資料

これにより、聞き取り者と共時的に出来事を話せるようになった。特に人間關係が複雑な花街では、芸舞妓の芸の上での姉妹關係を把握し、一種の派閥關係が分からないと聞き取りは不十分である。また民俗語彙の理解が不可欠であるが、進展があった。これらの調査を総合すると、天正から始まるとされる上七軒は、天満宮門前の茶屋から發達し、わかる範囲では大正以降西陣との關係を強めながら發達した。西陣との親密な關係は、芸妓からの聞き取りでも、明確になった。西陣は専属的に上七軒の芸（能）を支援し、それらを多用して纖維業商売の円滑化に役立てたと考える。また、当時は旦那芸が存在し、芸を修練し披露することで社会的信用を得たり、商売がうまく運んだりした。しかし、筆者は、それらの芸が西陣や室町的生活習慣の中から生まれた、つまり自然に身に着けたものだと考えている。そして、聞き取りなどから、それらの趣味や習慣に関わったのが、上七軒であったと考えている。

歴史の昭和27年の北野をどりを開始する際に上七軒は地元に根付いた舞の流派である花柳流を基盤に置きつつ、少人数ゆえに一人数役を受け持つ芸能の創出に取り組んできた。これらはこれ以降、せりふ劇、早変わり、新しい出し物の三つを特色とする上七軒の芸風となり、他の花街との差別化をはかる結果となっていると考える。

しかし、昭和40年代に入ると、ニクソンショック、レジャーの多様化、カラオケの普及等で花街は次第に衰退しつつあった。それに対し、かつて立方（踊り手）であった芸妓たちが、地方（三味線伴奏者）として舞台を助け、上七軒内にできた北野舞踏学校は臨時に芸舞妓のなり手を養成した。その後は、地方出身の見習いを舞妓に育て、花街は小規模ながらも経営を続け、上七軒としては過去最高数の舞妓をかかえるまでになった。

このように、舞踊の出し物を追うことで、経済的変化や社会的変化の側面を知ることができると考え、今後とも北野をどりの指導者である石田民三の「個」にこだわった調査研究を深めていきたい。また、秘儀性ある座敷芸が都市祭礼と考えられるかどうかについて考究していきたい。

なお、次の口頭発表を行った。

平成22年5月29日民俗芸能学会「花街における芸の継承—北野上七軒の北野をどりを中心に—」於：早稲田大学

平成22年10月10日JOHA「戦時中の花街の語り—Nを事例として」於：横浜北仲スクール

平成22年10月28日「石田民三を語り会」於：上七軒 路古路地

平成23年2月6日 JOHA「女性労働の場としての花街—京都上七軒の聞き取りの成果と課題」於：文京シビックセンター

また、生活学会、慶應義塾大学紀要に投稿し査読中である。

## 6. 今後の計画

現在、上七軒の近代化のアウトラインは把握しつつあると考えるが、今後「個」に絞ったライフヒストリーの研究方法をさらに推し進めていこうと考えている。そのため、本年6月に石田民三生誕111周年記念を主催し、上七軒の元お茶屋施設で口頭発表をしつつ、共同発表する石田民三の研究者やお茶屋関係者、地元住民の聞き取りを行う。また、同企画の延長で9月末に京都市歴史文化博物館で京都市協賛の石田民三の映画特集を主催する企画が進行中である。

これらの研究成果を論文の形で発表していくことで調査の質を上げていく。

## 5. 主な参考文献

有末 賢「序文」『都市民俗の生成第一巻』明石書店、2002

石田民三『京洛風流抄』京洛風流抄刊行会、1973

神崎宣武『遊郭成駒屋』講談社、1989

京都府『府下遊郭由緒』京都府、1872

佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社、1992

佐藤郁哉『フィールドワークの技法』新曜社、2002

佐藤郁哉『組織と経営について知するための実践フィールドワーク入門』有斐閣、2002

佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2008

鈴木正崇「日本民俗学の現状と課題」『民俗学の方法』雄山閣出版、1998

谷 富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社、1996

田口光一「都市民俗研究の一課題」『長野県民俗の会通信第45号』、1981

中野 卓・桜井 厚編『ライフ・ヒストリーの社会学』弘文堂、1995

中野紀和「ライフ・ヒストリーからみた都市民俗の生成—小倉祇園太鼓と映画「無法松の一生」の関わりから—」『生活学論叢第2号』日本生活学会、1997

- 中野紀和『小倉祇園太鼓の都市人類学的研究—ライフヒストリーからみた都市の文化動態—』慶應義塾大学博士論文, 2003
- 廣井栄子「花街に創出された「異空間」—大正期の都をどりにおける「琉球」と「朝鮮」の事例をめぐって」後藤静夫編『近代日本における音楽・芸術の再検討』京都市立芸術大学, 2010
- 深見きみ『はんなり京都—西陣と室町の暮し』河出書房新社, 1988
- 日本オーラル・ヒストリー学会編『日本オーラル・ヒストリー研究』1号～。2006～
- フランク『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房, 1993 (1981)
- 『方法としての聞き書』(思想の科学111) 思想の科学社, 1979
- エマーソン他『方法としてのフィールドノート』新曜社, 1998 (1995)
- シャッツマン, ストラウス『フィールド・リサーチ』慶應義塾大学出版会, 1999
- ラングネス, L. L. フランク, G.『ライフヒストリー研究入門』ミネルヴァ書房, 1993
- レイン・アグロシーノ『人類学フィールドワーク入門』昭和堂, 1994 (1984)
- ヴァン=マーネン『フィールドワークの物語』現代書館, 1999

## 依存症の問題を抱える家族の〈認識論〉の変化についての生命倫理

——医療人類学的研究——

大 沼 麻 実

依存症からの回復において、精神科病院やクリニックでは、依存症者本人に対する治療プログラムに加え家族教室や家族会といった家族向けのプログラムを実施しているところが少なくない。こうした家族向けのプログラムを通して、家族は依存症に対する知識を得て、依存症者に対する見方や言動を見直すことが期待されている。本研究は、そうした家族が依存症に対する〈認識論〉をどのように変化させるのかに焦点を当てる。

この研究課題に対して今年度は、依存症問題への家族の取り組みを分析した平成21年度の研究の継続という位置づけにおいて、依存症者本人の認識の変容を課題とした。回復に向かう依存症者の認識の変容を分析することは、依存症の問題を抱える家族のそれとの比較において重要である。

調査方法としては、アルコール依存症者のためのリハビリテーション施設である「MAC (メリノール・アルコール・センター)」のうちの数カ所〔東京 (立川・南千住・三ノ輪), 京都, 大阪〕を訪問し、プログラムの参与観察と通所者およびスタッフからの聞き取り調査をおこなった。またそのうちの施設を調査事例とし、2010年5月からの5ヶ月間、月2回×6時間の内外参与観察法による観察を実施した。さらに、主要な自助グループのひとつである「AA (アルコホーリクス・アノニマス)」でのミーティングにも随時参加し、AAメンバーに対してインタビュー調査をおこなった。

AAには代表的なプログラムとして、集団ミーティングと12ステップがある。集団ミーティングとは、依存症者が集まって「言いつばなし聞きつばなし」というルールのもとに飲酒していた頃の自分や現在の飲酒欲求などについて話すことである。一方の12ステップとは、「アルコールに対して無力であると認めること」など、AAの蓄積された経験に由来する回復のための12項目である。

こうしたAAのプログラムや理念にもとづいているのがMACであり、さらにMACではメンバーが